

※参考文献

- (麻生、一九四七) 麻生磯次『笑の研究 日本文学の洒落性と滑稽の発達』東京堂版
- (復本、二〇〇〇) 復本一郎『俳句源流考——俳諧発句論の試み——』愛媛新聞社
- (筑紫、一九九六) 筑紫馨井「俳句にとってへ笑い」とは何か 地下の論理」(上田五千石・夏石番矢・復本一郎編『笑の認知学』雄山閣出版所収)
- (山本、一九五二) 山本健吉『純粹俳句』創元社
- (山本、一九八三) 山本健吉『俳句私見』文藝春秋社
- (あきお・びん 軸俳句会)

「滑稽」問題のありか

中 森 康 之

シンポジウムは当初、三部構成を予定していた。

第I部 三氏による講演

第II部 それぞれの講演の理解を深める

第III部 講演によって浮き彫りにされた問題を検討する

しかし諸々の事情により、当日、急遽第II部の中に第III部を組み込む形で進行せざるを得なくなった。そのため閉会の辞でも指摘されたように、焦点のはやけたシンポジウムとなつてしまった。司会者として責任を痛感している次第である。

以下、司会という立場から当日のシンポジウムを振り返り、その意味を考えたい。

二

会場から出された質問を聞いてみると、現時点において「滑稽」を取り上げる意味が、必ずしも学会の共通認識となっていないように思われた(この点も閉会の辞で指摘された)。そこでまず、今回のシンポジウムの位置付けを明らかにしておきたい。

宮脇氏の「はじめに」にもあるように、俳句固有の方法の一つとして「滑稽」に注目したのが山本健吉氏である。さらにその意味が栗山理一氏によって考察された。氏は『奥義抄』に始まる滑稽積義の歴史を明らかにしながら、俳諧固有の基本原理を「意外性」という概念で取り出した。さらにそれを受けて、「滑稽」という視点が持つ射程を示したのが堀信夫氏である。氏の滑稽論の要点は次の如くである。

(1) 俳諧の諸現象は多様であるが、それを貫く俳諧固有の存在条件があるということ。

(2) それを滑稽、すなわち「道に非ずしてしかも道をなす」

〔『奥義抄』〕という矛盾律として取り出せること。

(3) 滑稽という視点を置くことにより、なぜ俳諧において

「新しみ」が重視されるか等の諸問題を、俳諧固有の

原理として解き明かせること。

(4) 作品鑑賞の際、滑稽性、俳諧性に留意すべきこと。

(5) 滑稽の原義は「機知に富んだ言動をする」ということで

あり、その転義として「おかしい」という意味が派生し

たこと。だから滑稽は「言語行為のある特殊な様相を意

味する言葉であった」こと。

(6) 俳諧とは、文学の一ジャンルの名ではなく、「思想」と

して捉え得ること（「思想としての俳諧」概念）。

(7) 「ことば遊び」を否定しない、正しい滑稽理解によつて

現実を相対化し、詩的世界の構築に成功したという点

で、談林俳諧を高く評価すべきこと。

その後本格的な滑稽論はなく、どういう訳か「笑い」に限定

されて論じられるようになる。山本氏から堀説に至る滑稽論は

十分検討されることなく、多くは放置され、また一部は穏やかに

浸透していった（4）など。ただし最近、堀切実氏によつ

て「俳諧という文芸を、その名称の原義にのみこだわって、ど

こまでも理解してゆこうと」（『笑い』と創造）第二集 勉強出

版 する鑑賞態度に疑義が提出された。

そのような状況の中で今回のシンポジウムが行われたことを

確認しておきたい。

三

さて、まず母利講演であるが、要点は三つあった。

①「俳諧」とは「体」、すなわちスタイルである。

②この時代の俳諧性とは「言葉の自由自在な使用」であり、

決して「滑稽」という概念では認識されてなかつた。

③俳諧はあくまで連歌の代用品であり、弟分としての気楽さ

と悲哀を持っていた。

前の二つは、端的に堀説のアンチテーゼと見ることが出来

る。①は堀説（6）「思想としての俳諧」という概念に対し、

初期俳諧における普通の人々の意識としては、「俳諧」はあく

まで「俳諧の連歌」の省略名称であり、「体」（＝スタイル）の

名称概念だったことを示したものである。同様に、彼らには

「滑稽」という概念そのものが成熟していないとする②は、滑

稽を俳諧固有の存立条件とする視点から初期俳諧を見ることの

危険性を示したものである。当然の如く、『奥義抄』以来の滑

稽積義をどう考えるのか、という質問が会場から出された。

この点について、滑稽積義はあくまで頂点にいる人の意識に

過ぎず、実際の俳諧活動に携わっていた普通の人々の意識とは

乖離していた。初期俳諧の実態を見ようとする時、これら普通

の人々の意識をこそ見るべきである、というのが母利氏の見解

だと私は理解した。滑稽積義によれば「言葉の自由自在な使

用」は「滑稽」という概念で捉えられてもよいと思われるが、

そうではなかつた点を重視されたと理解したのである。しかし

そのような私の纏め方に対し、会場での母利氏は首肯されな

かったので、或いは私の理解不足だったのかもかもしれない。

いずれにせよ、「俳諧史上の個々の現象を貫く俳諧固有の基本的条件が何かあるのだろうか、ないだろうか。あるとするなら何だろう」(『シンポジウム日本文学 芭蕉』学生社)という問いに答えようとしてきた滑稽論に対し、初期俳諧の庶民の意識には「言葉の自由自在な使用」以上の概念は存在せず、彼らを持っていた多様な感覚こそが問題にされるべきだという母利氏の提言は、今後十分検討される必要があるだろう。当然作品鑑賞にも重大な影響を及ぼす問題である。

さらに母利氏の提言は、次のような疑問を生む。では一体、いつ、如何なる理由で、俳諧において滑稽という概念が一般化し成熟するのか、という問題である。会場から母利氏に対し、その後の時代についても説明して欲しいという要望が出されたのも、この点に関わるだろう。ただしこれについては、講演中の「後に宗因風・守武風と貞徳風との論争の折に焦点となる滑稽」という表現以上の言及はなかった。今後ぜひ具体的に明らかにして貰いたい。

ただこの問題は、次の両講演に関わる重要なものなので、母利氏のもう一つの焦点である、③「連歌の弟分としての俳諧の悲哀、気楽さ」を手がかりに、私なりに玉城講演へと繋げることにしたい。

四

既に明らかにされているように、俳諧において滑稽概念が深化したのは談林俳諧においてであろう。これが芭蕉に受け継が

れ、支考によって展開されるのであるが、この滑稽概念の深化と、母利氏の「弟分」という比喩は密接に関係する。

詞かはれりといへども、心は和歌と同じものなれば、用をなす所またかはりあるまじきなり。(『俳諧談』)

母利氏が引用されている資料だが、ここでは俳諧活動の根柢(こういつてよければ俳諧が風雅(文学)であること)を、連歌が保証してくれているのである。だからこそ弟分である俳諧は、気楽に言葉の自在さを追求していればよかつたのである(それ故の悲哀もあろうが)。しかし次の文章になるとそうはいかない。

にがくしくもおかしかりけり
我おやのしぬる時にもへをこきて

(中略)

されども、俳諧の本意は格別の事也。(中略)俳諧は常をやぶり、俗をみだること葉なれば、もし、ある前句に至りては、「おやのしぬる時、へをもこきけるよ」と作意すべし。かゝる心をさとらねば、連歌にひとしくて、いつまでも俳諧といふものにはならぬ也。(『俳諧蒙求』)

ここでは単なる言葉の使用だけでなく、発想そのものの自在さ、柔軟さが問題にされている。そして、俳諧は連歌の一体ではなく全くの別物、俳諧には俳諧固有の存在意義があることが主張されているのである。ここに至って俳諧は、兄分である連歌から自立し、その存在根柢を自らの内に求めなければならなくなつたのである。滑稽概念が深化するのは、そのような状況においてであった。

ところで母利氏がこれを、滑稽概念の深化と見るか、弟分の気楽さの喪失と見るか、興味深いところである。

それはともかく、このような事態がそれ以降の俳諧史に何をもたらしたのか。まさしくその点で、母利講演は玉城・秋尾両講演へと繋がってゆく。両講演で捉えられた俳諧は、その固有性と風雅（文学）としての普遍性を巡って展開されているからである。

玉城氏が指摘されたように、芭蕉を経て最初にこの問題に直面したのが支考である。氏が引用された「おかしきは俳諧の名にして、淋しきは風雅の実なり」（『俳諧十論』）という支考の文章は、まさしく俳諧が、俳諧固有の存在根拠を持つと同時に、風雅（文学）としての普遍性をも併せ持つことを示そうとしたものである。すなわち「おかしき」は俳諧であること、の条件、「さびしき」は風雅（文学）であることの条件である。そして「おかしき」「さびしき」の両方兼ね備えて初めて、俳諧は「風雅としての普遍性を持つ俳諧」となり得る。ここから玉城氏は、「おかしみ」と「さびしみ」の問題として論を展開された。

五

玉城講演は大きく二つに分けられる。前半は今述べた「おかしみ」と「さびしみ」の問題である。具体的には「宝暦・明和・安永期（一七五〇～一七八一）に、支考俳論に影響された地方系蕉門俳人が「さびしみ」を芭蕉俳諧の本質であるとし、「おかしみ」（滑稽）は「さびしみ」に内包される趣向であ

り、かつ表現のひとつと考えた、こうした俳諧観が天明期以降近代の芭蕉観―俳句観を形成する上でも大きく作用している」という見取り図が示された。ここから講演は、後半、芭蕉句の読み直しの提言へと展開されるが、それは後で見るとして、氏が示したのは、芭蕉以降、俳諧は「さびしみ」と「おかしみ」の二項関係として捉えられてきたということであり、その原型である支考俳論の影響力の強さである。「去来抄」ですら支考俳論を補うものとして享受されたという指摘は興味深い。

しかしそうするといくつかの疑問がわく。一つは、なぜ支考俳論はそれほどまでに影響力を持ったのかという問題である。もちろん支考個人の能力にもよるだろう。会場からは、俳論の流布に関して、刊本と写本の関係を問う質問も出た。しかしそれ以外にも、例えば「さびしみ」志向のようなものが時代の空気としてあったのか等、〈さびしき芭蕉〉を受け入れる土壌の問題も検討される必要があるだろう。あるいは其角等をどう考えるのかという問題もある。その当たりもシンポジウムでは問題にしたかったが、残念ながら叶わなかった。

ところで、会場から「おかしみ」と「さびしみ」の関係について質問が出たが、玉城氏は「「おかしみ」は「さびしみ」に内包される「趣向」である」と答えられた。私にはこの「趣向」というニュアンスが今ひとつ理解出来なかった。また、会場からの求めに応じて、滑稽の定義を「共感し合う、共鳴しあうということ」と説明されたが、これもやや唐突な印象を受けた。この滑稽定義と「おかしみ」「さびしみ」問題がどう関係するのかがうまく掴めなかったからである。司会者として説明

を求めなかったのは、迂闊だったかもしれない。

それはさておき、続く秋尾講演では、玉城氏が指摘された「おかしみ」と「さびしみ」の問題が、近代に入っても形を変えて繰り返し現れることが示された。玉城講演の後半を見る前にそれを確認しておきたい。

六

秋尾氏によると、明治初期には「滑稽と風雅」の問題として、明治中期には「滑稽と文学」の問題として、後期には「滑稽と美学」の問題（中川四明『平言俗語俳諧美学』明治39年博文館）として登場するが、そこに一貫するのは、滑稽を風雅（文学、美学）の範疇に取り込もうとする意識だったという。

子規にしても、滑稽を排除しようとしたのではなく、むしろ「雅」のある深さを持った滑稽は子規の目指すところである」とし、「ホトトギス」こそは明治三〇年代の滑稽を生み出すメディアであった」と指摘する。秋尾氏はこの「深さを持った滑稽」を「有情滑稽（笑える涙）」（『平言俗語俳諧美学』）という概念で捉えられた。さらに大正末期からの「ホトトギス」には滑稽という概念が希薄になること、これは近代文学に歩調を合わせようとする虚子の意図であったこと等が述べられたと思う。さて、以上のように三氏の講演を見てくると、滑稽であることによつて背負わされた俳諧の宿命がよくわかる。始め連歌の弟分として、その存在根拠を問う必要のない気軽な遊びであった俳諧は、連歌からの自立と引き換えに難問を抱え込む。すなわち、俳諧固有の存在根拠と同時に、それが連歌に匹敵する風

雅（文学）であるという普遍的根拠を示さざるを得なくなったのである。この二つの存在根拠は、時代によつて、個人によつて、微妙に力関係を変えながら、ある時は「さびしみ」と「おかしみ」の問題として、またある時は「滑稽」と風雅、文学、美学の問題として、現代まで連綿と続いている。そしてこの、滑稽を文学として基礎付けるといふ最大の難問は、未だ解かれてはいないのである。

今回のシンポジウムで、非常に大雑把な見取り図ではあるが、そのことが三氏によつて確認されたことは、大きな収穫であったように思う。

七

さて、次に玉城講演の後半を見ておきたい。

玉城氏は、支考俳論の影響のもと、芭蕉句解釈から「おかしみ」が抜けてゆくことを指摘し、深沢真二氏の古池句解釈を高く評価された。そして芭蕉句を滑稽の視点から読み直す必要性を提言された。これは例えば、「蕉風俳諧が「さび」「し」をり」といった、古典的和歌の情趣に深く傾斜しているにしても、俳諧であるかぎり、そこには、機知的滑稽性、つまり笑いという固有の属性が本質的契機として継承され、内在しているはずだ」（『芭蕉とユーモア』玉川大学出版部）という成川武夫氏等にも通じる提言である。

冒頭でも述べたが、現在、俳諧性、滑稽性を読もうとする鑑賞態度が主流になりつつある一方で、俳諧性、滑稽性にこだわることが返つて俳諧の豊かさを奪うこと、むしろ詩性一般とし

ての普遍性の視点を強く持つべきだとする批判が出されている。玉城氏の提言は、当然これらの流れを踏まえたものなので、むしろ、今一度、俳諧性、滑稽性とは何か、という問題に立ち戻ることの必要性が、今回のシンポジウムで提言されたを受け取った方がよいだろう。単に芭蕉句の読み直しのみに関わる問題ではなく、母利氏の提言と合わせて、俳諧作品解釈の視点や態度に関わる重要な問題だからである。会場でも堀切氏と玉城氏の間で少し応答があったが、今後広い視野から十分議論されることを期待したい。

八

最後に、秋尾氏の指摘された問題をもう一つだけ見ておきたい。氏は、明治初期の滑稽を考えるには俳諧だけを見ては不十分で、庶民文化の潮流を視野に入れる必要があると指摘された。続いて、明治中期文壇には滑稽が満ちあふれているとした上で、俳諧だけでなく明治文学全般が滑稽という視点から見直される必要があるという提言をされた。

これは、冒頭で述べた滑稽論のうち、十分な議論のないまま放置されてきたものに関わる重要な提言である。現代の私たちは、ついつい俳諧（俳句）の中だけで滑稽を考えてしまいがちだが、滑稽積義を見ても、談林や支考の俳論を見ても、決してそうはなっていないのである。本来、「滑稽」の中で「俳諧（俳句）」を考えなければならぬはずである。そもそも、文学の一部に俳諧があるのではなく、俳諧の一部に文学があるのである。だとすれば、俳諧全体を捉えようとすれば、もはやこれまでの文学研究という方法論では限界があるのである。この事は

今後の俳文学研究の方向性を考えると、非常に重要な問題ではないだろうか。創立50周年記念のシンポジウムでこのことが改めて指摘された意義は大きいと思いたい。

それに関係するが、秋尾講演の後半では「俳句における滑稽とは何か」という氏自身の滑稽観が述べられた。ベルグソンの論との関係を問う質問もあったが、残念ながら会場では取り上げなかった。

今後このような、いわゆる狭い文学研究を超え出るような本質的な問題に正面から取り組める土壌が育つてくることを期待したい。もちろん議論のための議論ではなく、俳諧とは何か、滑稽とは何か、文学とは何か、そして俳文学研究は如何にあり得るか、という射程をもった議論である。

九 まとめ

シンポジウムでは、滑稽を考えることがこれからの俳文学研究にどのような意味があるかを端的に示すことは出来なかった。「図式的過ぎる」「偏り過ぎである」といった指摘が会場から出たのも事実である。しかし、滑稽という問題が置かれている現状を確認し、それが抱える諸問題を示し、滑稽問題が現代においても決して終わっていないこと、今後の俳文学研究において、今一度、立ち戻って十分に議論が尽くされる必要があることは、確認できたように思う。ここで出された問題は決して結論ではなく、一つ一つが、今一度十分検証される必要があるだろう。その意味で、話題提供というシンポジウムの最低限の責務は不完全なりに果たせたのではないだろうか。

（なかもりやすゆき 豊橋技術科学大学）